

令和 3 年 5 月 15 日現在

機関番号：24302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17K02458

研究課題名(和文) 文運東漸前史またはその成立要件としての初・二代西村市郎右衛門と出店源六の出版活動

研究課題名(英文) The study of Pre-Bunun-Tozen period through activities of publishers Nishimura Ichiroemon, II and the Edo Branch Genroku.

研究代表者

藤原 英城 (FUJIWARA, Hideki)

京都府立大学・文学部・教授

研究者番号：20264749

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、文運東漸前史としての江戸版好色本の出版状況と、京都の書肆西村市郎右衛門の初代・二代目の出版活動について調査した。

その結果、これまで十分に考察されてこなかった好色本3作品(『蜜漬の一曲』『好色三人紅』『逸題浮世草子』)が貞享・元禄初期に出版された早期の江戸版好色本であることが明らかとなった。また初代市郎右衛門はいち早く料理書の出版に着目し、二代目もそれを出版戦略として踏襲していることが指摘でき、文運東漸前史において料理書の出版活動も重要な要素であることが推測される。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究によって、江戸時代中期に至って文化の中心地が上方から江戸へ移行し始める、いわゆる文運東漸現象の発生的契機として、江戸根生いの地本屋の出版活動、特にその好色本の刊行が重要な要件となることが明らかとなった。また地本屋の活動のみならず、そこには上方の書肆、取り分け京都の版元西村市郎右衛門の初代、二代目の二代に渡る江戸への出版戦略が江戸出版界の隆盛、引いては文運東漸をもたらす要因となった可能性が浮上ることとなった。

文運東漸前史としての本研究の成果は、文学史のみならず日本文化史研究に新しい視点をもたらし、さらに西村の出版戦略としての料理書の刊行に関する考察は今後の新たな検討課題となろう。

研究成果の概要(英文)：This study is an investigation of the publication situation of the Edo edition Koshokubon(books on romance) and activities of the Kyoto-based publishers Nishimura Ichiroemon, II in Pre-Bunun-Tozen period.

As a result, it has become clear that three of the koshokubon books (Mitsuzuke no hitowake, koshoku sanninkurenai, and Itsudai ukiyo zoshi) are early Edo editions published in the Jokyo and early Genroku periods. In addition, it can be pointed out that Ichiroemon I was quick to focus on the publication of cookbooks, and that the second generation also followed this as a publishing strategy.

研究分野：日本近世文学

キーワード：文運東漸 西村市郎右衛門 江戸版 好色本 浮世草子 菱川師宣 料理書

1. 研究開始当初の背景

研究の学術的背景

文運東漸後の、いわゆる江戸文学を代表する一ジャンルである洒落本に関し、その画期となる江戸版『遊子方言』(明和7年刊)の作者が宝暦期に大坂から江戸へ下ってきた書肆丹波屋理兵衛であったことを明らかにしたのは中野三敏氏(『戯作研究』中央公論社、昭56)であった。しかし、確かに丹波屋の事例は書肆による文運東漸現象の好例と言えようが、あくまで一ジャンル(洒落本)の移植に止まる指摘でもあった。

京都の書肆西村市郎右衛門初代未達(元禄9年没)は西鶴本に対抗する「西村本」の刊行で知られ、貞享初年から好色本を刊行するが、それは西鶴のみならず、同時期に誕生する江戸版「好色本」を契機とする江戸書肆の「地本」「地本屋」意識に対処する方策でもあった。またその二代目市郎右衛門渠営(生没年未詳)は研究史上ほとんど言及されることがないが、自ら江戸に進出し、同時に出店西村源六をも設け、享保六年の江戸本屋仲間の公許に主導的役割を果たす。江戸本屋仲間の公的結成は上方書肆の既得権保護を目的とするものであったが、それは皮肉にも文運東漸を準備する歴史制度的要件として機能し、江戸書肆の地本屋意識を高揚させる結果となる。

西村本の好色本は当時において「都に好色文の達人西村市郎右衛門筆を振ふて西鶴を消す」(都の錦『元禄大平記』元禄15年刊)と評されるものの、今日的な評価は総じて高くない。藤原英城「新出の西村本『色道宝船』巻二について」(『和漢語文研究』10号、2012年11月)は、貞享元年から始まる西村好色本の刊行において、元禄二年頃に転換期を見出し、その春本化路線を江戸市場を見据えた戦略的な所為として再評価したが、その重要な転換要因の一つとして指摘した貞享・元禄期の江戸版好色本の出版状況については、今日においても第三者による本格的な調査・研究がほとんどなされていないのが現状である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、第一として、特定ジャンル(洒落本)の移植に止まらない、文運東漸現象の発生的契機としての上方書肆の動向、特に初代・二代目と二代にわたる京都の書肆西村市郎右衛門の出版戦略に着目し、第二に文運東漸現象の前史としての江戸版好色本の出版状況を捉え直し、その発生期である貞享・元禄期の江戸書肆の「地本」意識と江戸市場を意識した初代の「西村本」、特に元禄期に春本化するその特徴について検証することである。今日まで言及されることのなかった二代にわたる西村市郎右衛門の江戸戦略を江戸の地本意識との緊張関係で捉え、以後本格化する文運東漸現象の要件として位置付けようとするものである。

3. 研究の方法

科研費等でこれまで行ってきた宝永・正徳期の浮世草子を中心とした出版界に関する研究を時代的にさらに前後に伸長する形で、元禄期の好色本のあり方や宝暦期までの西村市郎右衛門・源六の出版活動と江戸・上方の版元の動向を考察する。具体的方法としては、文献資料の調査に基づく実証的研究を旨とし、() 所在の確認できる元禄期の好色本、ならびに() 元文～宝暦期における西村市郎右衛門・源六刊行書の伝本・書誌調査、() 江戸本屋仲間が公的に結成される享保6年前後から、南組が仲間の中通組から独立する享保12年前後までの版元動向の精査、() 関連資料の収集、() 上記の調査・収集に基づく研究成果の公開を行う。なお、国文学研究資料館等のマイクロ、デジタルデータの活用により、訪書調査の致命的困難を回避する。

4. 研究成果

本研究期間において、その研究成果として次に挙げる学会発表と4点の研究論文を公刊した。

(1) 京都大学国文学会(2018年12月2日 於京都大学)

「頼原文庫の好色本・浮世草子とその周辺」

(2) 「江戸版浮世草子『蜜漬の一曲(みつ漬の人和気)』(巻上・中) 翻刻と解題」(『京都府立大学学術報告・人文』70号 2018年12月)

(3) 「頼原文庫蔵『逸題浮世草子』とその周辺」(『国語国文』88巻12号 2019年12月)

(4) 「江戸版浮世草子『好色三人紅(好色三人もみぢ)』(巻一・二) 翻刻と解題」(『京都府立大学学術報告・人文』71号 2019年12月)

(5) 「食」と出版文化 近世前期における文芸と料理書を中心に」(『和食文化学入門』臨川書店 2021年3月)

(1) は京都大学文学研究科および同頼原文庫に所蔵される新写本『和気の裏甲』『逸題浮世草子』、版本『みつ漬の人和気』などの好色本・浮世草子について、新写本の底本や諸本について考察し、『逸題浮世草子』の底本が京都府立京都学・歴史館所蔵の『男色物』であることなどを発表した。当該発表は、科研費による本研究課題の一つである江戸版好色本に関する見通しを示すものであり、(2)～(4)の論文はその研究成果の一部でもある。

(2)はこれまで知られていなかった京都大学文学研究科蔵『みつ漬の人和氣』(巻中)を紹介し、名古屋市蓬左文庫蔵『蜜漬の一曲』(巻上)とともに翻刻し、解題を付したものである。当該書は刊行年代や構成等の書誌的情報が十分ではなかったが、本論文において、当該書が上・中・下巻全3巻9章で巻下が二分冊された4冊仕立てであった可能性や、菱川師宣風の挿絵が配されることから、それが貞享・元禄初頃の江戸地本屋の出版動向を体現した好色本であったことを明らかにした。

(3)は頼原文庫に所蔵される新写本『逸題浮世草子』の底本をめぐり、その伝本や頼原氏の学術的交流について考察を加えたものである。本論文において、頼原本の底本が京都府立京都学・歴史館所蔵『男色物(仮題)』であり、それが頼原の門弟であった新免氏の蔵書であったことから、頼原氏の日記をたどりながら、両氏の交流を跡付けるとともに、『男色物』が『好色三人紅』の後印改題本であり、それが江戸版『古郷帰の江戸咄』(貞享4年6月)を典拠とすることや、その挿絵が石川流宣風であることなどから、貞享末・元禄初頃の江戸版好色本であることを指摘した。

(4)は(3)において考察した『好色三人紅』(巻一・二)を翻刻し、解題を付したものである。当該書は奥付を欠くものの、貞享末・元禄初頃の江戸版好色本であることを(3)において指摘したが、さらにそれが西鶴『好色五人女』(貞享3年2月)の影響を受けながらも江戸版の好色本を新たに企画しようとする地本屋の動向を示す作品であることを分析した。

(5)は近世前期における文芸書と料理書の関係について、『仁勢物語』『浮世物語』などの仮名草子や『家内重宝記』などの重宝記類との比較、またそれらの刊行状況や西村市郎右衛門の出版動向に基づきながら考察したものである。さらに江戸版の料理書について、寛文10年頃に刊行された最古の献立集『料理献立集』の上方版と江戸版との比較を通して、上方版の挿絵が吉田半兵衛風なのに対し、江戸版が上方版由来でありながらも菱川師宣の挿絵を増補することで差別化を図り、江戸での商品性を強化する江戸地本屋の出版動向を解明した。

今後の展望

その他として、元文～宝暦期の二代目西村市郎右衛門とその江戸出店源六の出版活動や本屋仲間における動向については、新たな科研費獲得により、若干の追加調査を加えて今後発表する予定である。

本研究課題の成果により、文運東漸の発生要件として貞享・元禄期における江戸地本屋による好色本の出版活動が関与する可能性が明らかとなった。これまで上方と江戸との経済的関係性から説かれてきた文運東漸現象について、新たな要因としての江戸地本屋の初期の出版活動、取り分けジャンルとしての好色本の刊行が重要な契機となるとの分析予測は、文学史のみならず日本文化史にとってもインパクトを有する指摘となる。

さらに西村市郎右衛門の出版活動に関し、本研究当初に予期していた以上に料理書の刊行が江戸への出版戦略、引いては文運東漸前史において重要な役割を果たすことが予想されることになった。上記(5)において新たに得られた知見として、寛文6年頃、現存最古の書籍目録『和漢書籍目録』に初めて料理書が掲載されるものの、料理書が独立して立項されることはなかったが、初代西村市郎右衛門が刊行した『公益書籍目録』(貞享2年)において、初めて「料理書」が独立して立項される。初代市郎右衛門は早くから料理書に着目し、『合類日用料理抄』(元禄2年)を刊行するが、二代目市郎右衛門も『料理綱目調味抄』(享保15年)などの注目すべき料理書を出し、料理書の刊行には積極的な姿勢を見せる。

こうした二代にわたる料理書への着目は、単に西村の経営的戦略のみならず、「料理書」が実用から大きく遊び・読み物へとシフトする「料理本」へと変貌する18世紀中頃、すなわち文運東漸期における指標的ジャンルとして料理書また料理本が新たに浮上することを示唆することになる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 藤原英城	4. 巻 1
2. 論文標題 「食」と出版文化 ―近世前期における文芸と料理書を中心に―	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 和食文化学入門	6. 最初と最後の頁 99-121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 藤原英城	4. 巻 88 12
2. 論文標題 頼原文庫蔵『逸題浮世草子』とその周辺	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国語国文	6. 最初と最後の頁 5-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 藤原英城	4. 巻 71
2. 論文標題 江戸版浮世草子『好色三人紅（好色三人もみぢ）』（巻一・二）：翻刻と解題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 京都府立大学学術報告 人文	6. 最初と最後の頁 59-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 藤原英城	4. 巻 70
2. 論文標題 江戸版浮世草子『蜜漬の一曲（みつ漬の人和気）』（巻上・中） 翻刻と解題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 京都府立大学学術報告 人文	6. 最初と最後の頁 13-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 藤原英城
2. 発表標題 頼原文庫の好色本・浮世草子とその周辺
3. 学会等名 京都大学国文学会（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------